FULL　MOON

ＩＣＨＩ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＦＵＬＬ　ＭＯＯＮ

【Ｎコード】
Ｎ１７５８Ｑ

【作者名】
ＩＣＨＩ

【あらすじ】
草食系男子の兼松一が、クラスが同じの三浦美月に恋をしてしまう。
そんななか、一にいろいろなトラブルがふりかかってくる。

1996年　春

『人生すべて中途半端』　そんな言葉が頭をよぎっていた　札幌西中学校2年生の兼松一（かねまつはじめ）。　成績は良くも悪くもなく、スポーツもまぁまぁできるほうだ。　顔も他の人に比べたら、という程度。実に中途半端だ。

今日も、中途半端に生きるだろう　そう思っていた。

「一！　はやくおきなさい！！」

母の友美（ゆみ）の声が家じゅうに響き渡る。

「はぁーい」

一応返事は返す。

そして、ベットからおりて、階段の壁に小指をぶつけ目がさめる。

「いってぇーー！！！」

いつもどうりだ。

こんな生活がずっと続くと思っていた。

やっと学校に着いた。

「ふぅ。」　とため息。

そして寝る…　授業の半分は寝ている。

だけど　たまに起きてはあいつのことを見ている。

三浦美月（みうらみづき）。　昔からの幼馴染で家も走れば10秒もしないようなところにある。　なんかしらないけどいつも見てしまっている…。

自分でもなぜみているのかよくわからない。

そうしているうちに、授業が終わり、部活に走っていく。

下手だけどなぜか副キャプテンに選ばれてしまっていた。

だから、めんどくさいけど金山和樹（かなやまかずき）先生にメニューを聞き、グランドにダッシュする。

そして、バッティング練習をして、その後にノックを受けて今日の部活は終了。

僕の家は学校から20～30分にあり、その長い帰り道で友達の駿（しゅん）、

千春(ちはる)、
隆太(りゅうた)とふざけながら帰る。　楽しい時間―。
しかし、この3人とは途中でわかれ、１０分ほど1人の時間がある。
そんなとき、またなぜか美月が頭の中にうかんでくる。
『わぁー！』　とか頭の中で思いながら美月をかき消している。
そうしているうちに、家についた。
家の中に入り、シャワーを浴びて、終わったらすぐにパソコンをつける。
メールをする。　中途半端に生きている一の趣味と言っても過言ではない。
メールの相手は、美月だ。　一は恥ずかしがり屋で直接はあまり話さないが、メールだとなんでも美月に話せてしまう。
今日のメールの内容は、美月の好きな人のことだった。
「美月って好きな人いるの？」
「んー、　隆志(たかし)かな」
隆志は美月の弟で、いま　４歳だ。
「いや　それは弟だろ！！　中２で！」
「そしたらぁ・・・　一！！」
「え・・・おれ？」
「うそだし　ばぁか。」
なんてことを1年生の時からずっとやっていた。
だから冗談とかで
「美月のことすきだよー」　とか普通に送ってた。
付き合っていないのに付き合っているような仲だった…

1996年　夏

やっぱり　春から何も変わらず中途半端に過ごしていた。
そしてきずいたら美月は、友達の直樹と付き合っていた。
そのことを知った僕は、美月とのメールをやめ、新垣(あらがき)そらとメールをしていた。
そらは、クラスも違っていたが、その時学校ではやっていたゲームで知りあって、アドレスを交換した。　性格は少し気が強いけど、それは美月も同じだったから別に気にはしていなかった。　気が強いけどすごく優しい人だから、あんまり話していなかったけど、いつの間にか告白してそらと　付き合っていた。
いま思うと、美月に対して反抗したかったのかもしれない。
付き合ってから何日もたっているのに　そらに話そうと思ってもなかなか声が出ていなかった。　その時自分のことがとても嫌いになった。
『なんで付き合ったのにはなしかけられないんだ。』　自分をめちゃくちゃ責めたけど、次の日もその次の日も話せなかった。
　そして、数日後　その日は部活がなくてそらと一緒に帰りたかったから、話しかけようと思ってた。　『これで話しかけないと、絶対にきらわれちゃう。』と思ったから、恥ずかしかったけどゆってみた。
「今日一緒に帰ろう？」
やった。　言えた！！　これくらいで喜ぶのはおかしいと思うけど
　当時の僕はそれでせいいっぱいだった。
「いいよ。」
やさしそうなそらの声が僕の胸に響き渡る。
　そして帰り道、ゲームの話とか　授業の話、先生の愚痴とか　いっぱい話した。
でもすぐに家についてしまい、楽しい時間はすぐに終わってしまっ

た。
「じゃ　また明日ね」　そう言って家に帰って行ったそらをさいごまでみて
『また今度一緒に帰ろう』　そう心に決めていた。
次の日になると昨日一緒に帰ったから　話さなくてもいいと思ってしまい、廊下ですれ違っても　目をそらしたりしていた。
部活が終わり家に帰ると1通のメールが来ていた。　そらからだった。　うれしくてすぐにみてみると。
「うち、　一のこと友達として好きだわ…」
え…　言葉がでてこなかった。　初めて付き合ったのにたった2週間もしないうちにそんなこと言われるとは思っていなかった。　頭が真っ白になり　なにも考えられなくなった。
「え…」
一応返信は返した。
いやだった。　別れたくなかった。　胸が痛む…
「だから、ホントには好きじゃない」
そらのメールを見るだけで悲しくなる。
「おれは、別れたくない」　そんなメールを送る。
また　頭に中途半端の4文字が浮かび上がってくる。
「でも　うちは別れたい。」
胸に突き刺さる。　ダメだ…　そう思い、
「わかった。　別れよう。　ばいばい」
と　送った。　実際、なにも話さなかった　自分が悪かったのに、
『また中途半端なままだよ…』
それっきり　そらからはなにも送られてこなかった。
もう　そらのことは忘れようと思い。　夜中なのも関わらず、家の真正面にある緑地に行って　何時間も素振りした。
自分のことを責めながら、思いっきり振りまくった
ふと、　空を見上げると、雲ひとつない　綺麗な星空が広がっていてそこに満月が美しく輝いていた。

きれいすぎて涙がこぼれた、　『好きだった』　と心の中で叫びながら…

中２の僕には切なすぎる夏の夜のことだった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1758q/

ＦＵＬＬ　ＭＯＯＮ

2011年1月19日03時54分発行